

くれワンダーランド構想推進会議第2回会議 摘録

1 日 時 平成30年11月16日（金）13時30分～16時10分

2 場 所 呉市役所本庁舎 753・754会議室

3 概要・骨子

～ 市長挨拶・事務局説明 ～

13:30

【市長挨拶】

本日は貴重な時間を割いて御出席いただき、誠にありがとうございます。

このたびの7月の豪雨災害から4か月少しを経過いたしました。あらためまして、豪雨災害でお亡くなりになられた方々に対しましては心より哀悼の意を表します。また、被災された多くの方々に対し、心よりお見舞いを申し上げます。

また、本日御出席をいただいた皆様方、後ろに座られていらっしゃる皆様方にも様々な形で復旧・復興に向けて御尽力をいただいております、この場をお借りしましてお礼を申し上げます。ありがとうございます。

呉市では、復旧・復興を行いますとき、縦割りではなくて全庁挙げて統一的に進めるために、9月に復興総室という新しい組織を立ち上げました。それから復興計画の策定に向けて、呉市に復興計画検討委員会を立ち上げまして、去る10月26日に第1回の会議を開催いたしました。

現在、市役所がなすべき最も大事なことは、被災された方々が一日も早く日常を取り戻されること、そして市民の皆様が今後将来に向けて安心できる、安全なまちづくりを目指すことであると考えております。そして同時に復興を進めるに当たっては、市民生活全般にわたり、被災前以上に元気とにぎわいがあり、魅力あふれる呉市を目指していかなくてはなりません。

くれワンダーランド構想の考え方、すなわちこれまで以上にワクワク・イキイキできる呉市を目指すことは、今後の呉の街の復興に向けて大事な方向でございます。

構成員の皆様方には、呉市の復興を進める中で、くれワンダーランド構想の推進力として御尽力を頂きますように、どうぞよろしくお願い申し上げます。以上でございます。

【会議の公開、資料確認、欠席者等について事務局から説明】（省略）

【資料「くれワンダーランド構想の推進に当たって」について濱里副市長から説明】

今日は皆様お忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。

冒頭の市長挨拶の補足という面もありますが、第1回から今回の第2回の会議までの間に平成30年7月豪雨災害があり、時間も少々経過したということもございますので、改めまして、くれワンダーランド構想の目指している姿、推進の方向性について、今日の議論の前提の確認の意味で、説明をさせていただきます。

この資料「くれワンダーランド構想の推進に当たって」は、くれワンダーランド構想が「何か」ということを書いた資料ではありますが、ある意味では、「何ではないのか」ということを意識して整理をさせていただいたペーパーでございます。

資料の上の部分ですが、まず1行目、2行目に記載のとおり、くれワンダーランド構想はこれまでのように市役所だけが主導して予算や計画を組んで事業執行をしていくものではないということです。予算要望があって、予算を計上して市がやると、それだけのことであれば、今までどおりなので、わざわざこういった会議を開くような話ではありません。この会議を開いて、くれワンダーランド構想を進めていくことは、むしろ、以下の段落に記載しているようなことを呉市として進めていきたいと、そういう視点で進めていくということでございます。

「推進の方向性」も資料記載のとおりで、「構想」という言葉がありますが、総合計画等がすでに呉市にある中で、決して「くれワンダーランド構想」という別の計画をこの会議で作るということではないということです。市長マニフェストにおけるくれワンダーランド構想の資料全体には呉駅前総合開発といった事業的なものも一部含まれていますが、そういったものは、例えば、呉駅で言うと別に懇談会を開催しております。そういった意味で、この会議との住み分けということも含めて申し上げれば、「当推進会議は何か計画を策定するのではなく」ということでございます。

市だけの取組ではない、官民含めた自主的な取組がどうやれば呉市全体へ広がっていくかというところを、皆様から幅広くお知恵を頂戴して、どう進めていくかを考えていきたいということです。具体的な方向性は、現段階で考えられることとして二つのことを書かせていただいています。

一つは、すでに呉市の中では、くれワンダーランド構想の考え方とある意味では軌を一にする取組が芽生えつつあると認識しています。こういったものを広げていくための情報収集、そして発信をする。その上で、もう一つは、情報の収集・共有を踏まえて、それをどうつなげていくか、市の中に存在するものをどうやってつなげていくか、というところに意を用いたいと考えています。

その際、例えば、2の2行目で「公共空間の使用規制の緩和」、何か事業をやりたいときに、単に補助金があればできるということだけではなく、「こういう規制が緩和されれば、やりたいことがもっとやれるのに」といったところ、市民の方々や民間企業の創意工夫を活かせる環境づくり、こういったところについては特にこの会議で様々な意見を頂きたいと考えております。

もちろん、規制ということになると、市の規制もあれば国の規制、県の規制もあるので、全てできるかという調整が必要となると思いますが、特に市でできるようなことであれば、積極的に取り組んでいきたい。そういったことを念頭に置きながら、議論を頂戴できればと思っていますのでございます。

また、全体的なくれワンダーランド構想をしっかりと市全体に根付かせていくための仕組みについては、次回以降も必要に応じて、座長の御指導も頂きながら、議論を進めてまいりたいと考えていますが、今日の議論に当たっても、そういった点も念頭に置きながら御意見を頂ければ大変ありがたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

～ 議題：くれワンダーランド構想に向けた取組について ～
(観光振興等分野)

【呉の魅力を増やす，発信する】

- 写真を思わず撮りたくなるようなSNS映えをするスポットを新たに作れば，撮影目的で足を運ぶ人は増加するのではないか。イルミネーションやプロジェクトマッピング，また，日本の四季を楽しみに来る海外観光客向けに，四季折々の植物を植えるなど，工夫ができるのではないか。
- 呉の現在の名物に加え，新しい名物を創れば，話題性があり，それを目当てに来られる方も増えるのではないか。専門店で協力をしてもらってプロモーションをし，スイーツや牡蠣などを始め，瀬戸内海をアピールできないか。併せて，瀬戸内海の絶景スポット，釣りスポットなど紹介できていければ良いと思う。
- 今の若者は，テレビよりスマートフォンを見ている時間の方が長い。ハッシュタグや英語表記など様々な工夫をして，SNSを最大限利用した情報発信を行ってはどうか。
- 観光客が安心して街歩きができるよう，英語案内ができる人や場所，また，フリーWi-Fiスポットを増やす必要があると思う。
- 10代・20代のリアルな声を聞くことで，若者が呉市に明るい将来性を感じてイキイキするのではないか。
- お年寄りにも輝いてもらうよう，おしゃべり空間を作り，また，古くからある文化などを若者に伝える機会を設けるなど，老若男女がつながり，輝ける街にできたらいい。

【瀬戸内海や街並みを生かした観光振興】

- 文化ホール，図書館，大和ミュージアムなど，れんが造りを思わせる，一体感のある建物を生かして雰囲気を作り，まちづくりを観光振興につなげていければいいのではないか。
- 国道31号・185号は，渋滞することはあるが，海が見えてすごく気持ちがいい，自衛隊の船などが通るのを見て子どもがすごく喜ぶ，という意見もあり，あえてゆったり国道を走ってもらいながら呉に向かってもらうというのも，良いのではないか。
- 平日でも土日でも，いつ行っても人がいるような，魅力のある「道の駅」ができれば，観光の一つになるのではないか。

【観光客を呉に滞在・周遊させる仕掛け

(観光案内機能を備えた道の駅・海の駅)の整備】

- サイトシーイング型観光の呉の弱点は，拠点となる場所がなく，情報を得ることが難しいということではないか。
- 観光情報プラザは大和ミュージアムへ向かう途中に置かれているが，大和ミュージアムに行く人はそこが目的なので，寄っている方は多くないのではないか。
- 大和ミュージアムの近くに観光案内所を設置するという考え方を発展させて，現在，有効に活用されていない中央栈橋に「海の駅」を設置してはどうか。駐車場があまり確保できないので，コミュニティバスのようなものを準備してはどうか。
- 「道の駅」は，駐車場が無料なので，相当広い駐車場がないといけない。クレアラインの途中，呉ポートピアに「道の駅」を設置してはどうか。駐車場も広く，広島・呉からの31号線，更に焼山方面の三方面から来られる。江田島からも船があり，「道の駅」プラス「海の駅」と言ってもいい。天応地区は，今回，豪雨災害での被害が大きく，活性化の手段の一つとして，ポートピアを「道の駅」にすることを考えてみてはどうか。

【島嶼部を中心とした体験型観光の推進】

- 広島には、現状でも相当な数のサイクリストがいるが、これから、もっと増えると考えられる。また、海岸線、しかも、東に向かって島嶼部を走りたいというニーズも高いので、サイクルコースを整備すれば良いのではないか。全国からやってくるサイクリストの受け皿にもなる。
- しまなみ海道は、今治がゴールだと思われているが、フェリーで岡村島まで来れば、そこからとびしま海道に渡り、安芸灘から広・音戸を越え、かきしま海道、江田島、そこからフェリーで広島へと、こういうルートが考えられる。これができれば、何泊かするような、ゆったりとした休日を過ごせる。
- しまなみ海道は、サイクリングコースが整備されているだけでなく、地域住民のサイクリストの受入れ態勢も整っている。当地でもそうした態勢づくりが望まれる。
- そのほか、すでに蒲刈や倉橋では、シーカヤックやSUPの体験コースを開催している事業者がおり、そのようなシースポーツを体験できる事業を支援する必要があるのではないか。
- 7月の豪雨災害を経験し、観光客に災害情報を迅速に伝える手段を整備し、そのことをPRすれば、観光客も安心して呉市に来られるのではないか。
- 日本遺産に登録され、旧軍港4市でいろいろ取り組まれているが、戦争遺構を観光の題材としてPRしていいのかどうかというスタンスが、まだ何となくはっきりしていない。我々は、平和教育のためにこれを遺してきているので、そういった観点をもっとはっきり示していったらいいのではないか。

【呉市復活新計画 - くれワンダーランド構想 -

まちに笑顔が溢れるイキイキした呉に！

【大和ミュージアムを起点とした観光ワンダーランドの整備】

- 「滞在時間が延びれば、当然消費が増える」、「長距離移動すると財布のひもが緩くなる」といった調査報告があり、「遠くから来てくれれば、それだけお金を落としてもらえる」ということを示している。
- まず、広島に来る人が呉に来てくれるということを検討してみる。調査報告によれば、「旅先で最も楽しみにしていたこと」について、日本全国では、「おいしいものを食べる」、「温泉に入る」、「自然景観を見る」といったことが多いが、広島では、「文化的な名所を見たい」というのがダントツに多い。したがって、広島に来る方であれば、呉に歴史・文化的な名所があることを訴えることによって、もう一足伸ばしてもらえるのではないか。
- 呉の文化財についてはすばらしいパンフレットがあるが、呉市のホームページで同じ情報を見ようとすると、俯瞰的、網羅的、地図的に見ることができず、不便である。パンフレットをそのままホームページ化するだけでも非常にすばらしい。
- 市内の移動と滞留の状況を見ると、観光客は「大和ミュージアム」と「てつのかじら館」には行くが、ほかはほとんど行っていない。ミュージアム内への観光案内所の設置や、ナイトミュージアム等のイベントの開催など、大和ミュージアムを起点に市内全体の観光振興を行っていくべきではないか。また、大和ミュージアムのホームページの目立つところに観光情報を置いたら良いのではないか。
- 大和ミュージアムから、例えば、「アレイからすこじま」や「れんが通り」の北まで、ワンコインでいけるような移動手段があればいいのではないか。
- 市内に泊まってもらうには、夜過ごしてもらわないといけない。例えば、800m半径で夜10時以降に入れるレストランの数をみると、呉駅は東京の青山1丁目とほぼ近いが、残念ながら泊まる所があまりない。呉駅周辺には、賃貸アパート・マンションの空室が多くあり、民泊に開放すれば、泊まってもらえるのではないか。
- 呉市は、広島と東広島への転出が多い。これらの都市への転出を抑制すれば、人口が増えるし、呉市の未婚者の6割は結婚したいと思っているから、これを加速させればいいのではないか。

【「道の駅」制度を活用した拠点整備】

- 県内の「道の駅」の設置状況を見ると、広島市と呉市を中心として空白地帯になっている。市内の地域拠点に「道の駅」を設置し、呉駅を拠点に有機的につないでいくという観点で考えて行くべきではないか。
- 「道の駅」のモデル事業では、温泉が付設されていたり、憩いの場、交流の場の機能があったり、診療所、行政窓口、図書館などを付設したワンストップのものがある。
- 小豆島のオリーブ公園は、島なので住民の活用を念頭に置いており、また、宮崎の日南では、お弁当を宅配するのに使っていて、これらは観光客向けだけではない。
- 輪島では、「道の駅」を起点として、将来の無人自動走行も見据えた電動カートを導入している。
- 社会的な問題を解決できるということと、新たな価値の創出として、自動運転が出てくる。それでどこに行くのか、何を楽しむのかということで、拠点づくりの話につながってくる。
- 自動運転については、短い距離、低い速度ができるようになることについては、もうすでに検討が始まっており、旅館で宿泊客の車両を回送するサービスなどができる可能性がある。

【分野全般に係る意見交換】

- 「道の駅」が、どうして呉には全然ないのかというと、原因は土地の問題ではないか。良い場所はだいたい使われているので、土地の確保が現実問題になってくる。
- 安浦も盛り上がってほしい。海沿いにある飲食店、安浦方面も休憩スポットとして発信していけないかと思う。
- 風早に、「道の駅」の地産地消の部分だけを実現しているJAふれあい市場があり、こういったものが安浦や呉に近い所にあつたら良いと市民の方は感じていると思う。
- 安浦には、グリーンピア安浦（現：グリーンピアせとうち）があり、昔は夏になったら行列ができるくらい多くの人が集まっていた。土地もあり、例えば、そういうものを生かしたらどうか。
- 例えば、ショートコースで半日観光の標準ルート、ちょっと足を伸ばして1日観光の標準ルート、1泊2日観光の標準ルート、それぞれのお薦めの宿泊場所はここ、といったものを示し、これらルートのネットワークをつなぎ、広げていくことも、一つの手法ではないか。
- 様々な観光情報が、市役所や観光協会、呉地域観光連絡協議会、広島県のホームページなどにすでにあるが、分かりにくく、見る人の立場に立っていないのではないかとと思われる。利用される方々や技術の専門家の意見を聞き、市役所だけでなく、みんなで連携して考えて、分かりやすくすることが解決であると思う。
- 観光なら観光で、いろんな観光団体があり、情報が共有されていない現状がある。呉市は、竹原なども含む地域の中核都市であり、DMOを立ち上げて、観光振興体制を一本化したようなものがあればいいのではないか。
- DMOはすごく良いが、それはみんなでやらないとできないし、しかも、観光の関係の方とか商工会議所とか民間が中心になり、応分の負担でないとできない。また、みんなが自然に集まってくるよう、機運を醸成していく必要がある。
- 呉市は、JR、クエアライン、航路があり、通勤や移動について強みがある。呉市役所の周辺には、図書館、文化ホールなどの公共空間や病院などが、かなり連坦・密接している。呉市役所を中心に、「道の駅」的なにぎわい、住みやすい所、バスの拠点などがあつてもいいのではないか。きれいなまちをわざわざ見に来るといふ観光もある。美しいまちをつくれれば、人が集まってくる。そういった、住んでもらう都市づくりを進めることも、一つの策かと思う。
- にぎわいは、歩いてもらうところからできる。歩ける空間ができないと、なかなかにぎわわない。ここと駅は離れているから不便だと捉えるのか、せっかく離れているのだから、できるだけその間を歩いてもらって、何か楽しいことがあるように、まちをつくってあげれば良い。
- わざと歩いてもらう空間づくりは、結構、難しい。移動の両端で駐車が必要なので、1台の車には必ず2か所駐車場が必要だと言われているが、近距離でも車で移動するようになると、それが2倍では済まなくなってしまう、結果的に、街中が駐車場だらけになってしまう。
- 外側にしか車を置けないようにし、それで無理矢理歩かせるようにしているようなまちに、フランスのボルドーがある。
- 観光というものは、お金を落としてもらうためではなく、人との交流、心を通わせるということが大事である。ある講演で、「まず、観光バスを見かけたら観光バスに手を振ったらどうですか」というお話があり、そういうことをやるだけで「呉の人は温かいな」というふうに感じてもらえるのだなど、非常にもっともだと思った。

【起業家をトータルにサポートできる支援体制の整備】

- 呉市が行っている「起業家支援プロジェクト」に期待しているが、起業家は横のつながりが弱く、不安を感じている。呉市内には、法務、税務、中小企業関係を始め、色んな活動をしている団体がある。そういう団体と連携しながら、起業家をトータルでサポートできるよう、息が長く、横のつながりを意識したサポート体制を進めるべきではないか。

【“made in KURE” のブランド力の更なる向上】

- 東広島市では「コラボスクエア」という施設が主催して、「東広島ものづくり逸品認定」を行っており、同市に本社を置く企業が創った様々な製品を認定し、それを、産業見本市などに出すのを支援するという取組を行っている。呉市でも取り組めば良いのではないか。

【専業主婦や定年退職後の元気なプラチナ世代が柔軟に働き続けられる仕事の仕組み】

- 創業セミナーなどの単発の支援ではなく、創業準備を進めたい女性が、日常生活を送る中で、子どもを遊ばせながら、子育てとやりたいことを両立できるような環境で、ミーティングや相談ができる場を設置してほしい。
- 徳島県の事例のように、島嶼部の市民でもどこでも仕事ができるように、ICT環境の整備をして、柔軟な働き方ができる環境と、自分らしい仕事の創造というところまで推進することを検討していただけないか。
- くれワンダーランド構想の一番の原動力となるのは市民の力だと思う。子育て世代や子育てを終えた世代、定年退職後の世代など、潜在労働力をまちの活性化や課題解決に活かせる仕組みや環境づくりが必要ではないか。市民に行政的な仕事をってもらうスタイルであり、社会の中で、長く働き続ける仕組みがあれば、出生率が高くなり、子育てしやすい呉市になるのではないかと思う。

【分野全般に係る意見交換】

- ICTそのものは、実は、お金が掛からない。携帯、パソコン、Wi-Fi (Wi-Max) など、すでに素晴らしいICT環境があり、インフラはもうできている。様々なビジネスを行える環境がすでに整っており、それを使って何をやるかということが一番大事である。
- 街の絆は非常に強く、頑張ろうという気運は高まっており、若い人たちは頑張って創業している。今後、より創業に繋げていくためには、例えば、福山市ではリノベーションまちづくりスクールや、専門家の派遣、講演会などが行われており、そういった支援があれば良いのではないか。
- ホームページのトップにイベントカレンダーのようなものがあれば、イベント主催者も市民も、次の週末に何があるか分かるのではないか。
- 呉市のホームページは、他の自治体に比べて情報は圧倒的に多いが、最大の問題は見つからないということである。呉市ホームページに掲載している情報を、市民や民間企業が、自らのホームページ等で利用者の目線から目的別に再編集して使用・発信することを推進することで、市民にとって必要な情報が見つけやすくなるのではないか。
- Made in KURE のロゴを作るより、呉氏のキャラクターを開放した方が手っ取り早いのではないか (キティちゃんの例がある)。加工したり、色を変えたり、何をしてもいいというように、広がりを持たせるようなことができないか。

(大学、研究機関等との連携)

【大学、研究機関等の誘致】

- AIの時代が確実に来るのだから、データサイエンスエンジニアというAIを作るエンジニアを養成する学校を誘致してはどうか。
- 呉市が保有するデータをより詳細に公開することで、公共データを活用したAIの研究所などが世界中から呉に集まることが期待できるのではないか。
- 地域に貢献するグローバルリーダーを育成する大学を作ったらどうか。日本の文化あるいは呉の文化を知りながら、多様な人達、いろんな国の人達と国際交流ができる人材を作る大学が、一つあったら良いのではないか。
- 広島大学の呉のサテライトを呉市役所の中に置いて、社会人講座や技術相談などを展開してはどうか。

【分野全般に係る意見交換】

- 呉市は情報公開を行っているが、スタティック（静的）な経営統計分析的なものには役に立つかもしれないが、いわゆるAIの分析には、もう少しリアル（動的）なデータが必要である。例えば、図書館であれば、何の本がいつ、どれくらいの期間で貸し出されているか、駐車場の情報であれば、何時に入って何時に出たか、大和ミュージアムが年間100万人来ているが、何曜日、いつの日に来ているのか、という情報が必要である。
- AIというのはデータが全てで、世界一のAIの会社はGoogleで、その後ろをFacebookとAmazonが追いかけている。しかし、これらの会社は住民のリアルな情報は手に入らない。呉市のリアルな情報を公開し、AIの開発をやってくれる企業や開発者を呉市に呼び込んで、産業を興すことができるのではないか。企業や開発者にとっては呉でAIを設計して育てるメリットがあり、呉市は、呉市のデータで作ったAIの結果物を市民サービスの向上に使えるという、両者にメリットのある形になる。
- 先ほど紹介した東広島の「ものづくり逸品認定」の取組には、地元の大学が深く関与している。産学官連携を強化する意味でも、大学や研究機関の誘致は必要である。また、広島大学のセミナーを受講するために全世界から集まった学生に瀬戸内海の多島美を体感してもらおうと蒲刈島へのバスツアーを企画したところ、大変好評だった。多くの学生が集まる大学は、情報発信の手段としても有効である。